

2013年度（平成25年度） カラ事業報告書



甘く酸っぱい野生の果樹（ザバンの花）

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会

東京事務局 〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

電話 0422-29-7640 FAX 0422-29-7688

バマコ事務局 BP-E367 BAMA KO

電話 00223-2020-90-96 FAX 00223-2020-35-89

はじめに…

マリの人々と関わって20年以上が過ぎました。
歩いてきた道をその思い出と共にたどってみました。

村上 一枝

時々会員の方々からお電話で現地のセキュリティー状況をお尋ねいただき、ご心配をいただいております。私どもは会員の方々のお気持ちに感謝しております。

今日も政情不安定なマリですが、カラの活動地域は直接的に何ら影響もなく、平成 25 年度(2013 年度)の事業もおかげさまで計画通りに進めることが出来ました。ご支援くださった多くの方々にお礼申し上げます。バマコ事務局とは頻りにメールで連絡しております。雨季のため停電が多く連絡が不可能になることがあります。今の日本では考えられないことですが、事務局に時々雨漏りがしていると思います。以前にはものすごい音がして落雷があり、その頃はワープロを使っていましたが、内容が全部消えて大変なショックでした。その後にはカラは避雷針を設置しました。

写真のように、かなたから雷雲が迫ってきます。冷たい風が吹いてきます。こうなるとみんな仕事を放って家に走り帰ります。



サテ今回は、個人的な経験も込めて今までたどって来たことを振り返ってみました。今日に至るまで、予想していなかったことが非常に多くあり、笑えることも悲しいことも、怒りに燃えたこと(今も時々そうですが)もありました。

1993 年末頃からカラの活動地域を探すために、数回、自動車をレンタルし、またローカルバスでバマコ市内から 200 km 以内で交通の便が比較的に良い場所を条件に、足を運びま

した。その時に気が付いたのは、舗装道路に近く場所には他国の支援団体が多く集まっていた。しかし、奥地の多くの村では、老人と女性と子供たちが多く、働き盛りの男性は殆ど出稼ぎに出ています。そんな村に限って井戸が壊れていて水が無いのです。老人はタバコの栽培やゴザを編んでいました。世界的に著名な団体のプロジェクトも実施されていましたが、担当者(マリ人)の使い込みで中止になったままでした。この先の進展の見込みも無く今だからそのままに放置されたままの状況です。水道塔を建設し各家庭に水を引き込む工事も行なわれていましたが、地上から水道管が1m頭を出したままで工事は放置され、学校建設も建設費を持ち逃げされ途中で放棄された状況でした。そして「これどうしたの?」と村人に聞いても「サーー」という返事で、村人は全く関心がありません。多くの先進国から多額な支援があっても、それが生きていないのです。村人に本当に必要で、一緒に活動を進めるものではないと「天から降ってきたモノ」という感覚なのだろうと思い、「ハコモノ支援」であっても本当に望まれていないものは適切な支援にはならないことを学びました。水や診療所、小学校が全くない村が多くありました。野菜も栽培されていなく旱魃の時には、木の根やトウジンヒエの脱穀した粃殻を食べ、1日1食の年もありました。日本で毎日不足の無い生活をしてきた私(日本人)は、この状況で生活できるだろうか?と考えたのを覚えています。

多くの村を視察し、村人から話を聞いて最終的に選んだのが、ダウンバ コミュンのバブグ村でした。この村は不定期バス(人数が集まると出発するバス)が停まるコッサバ村から東方へ4kmほど奥の村です。バス停からの道は日陰になる木がなくバマコの事務所を早朝に出て昼すぎに着き、宿舎まで歩くのですが非常に苦勞でした。雨季には道の両側がトウジン



ンヒエの畑になって蒸し暑いのです。バブグ村よりズット奥まで村があり、みんなこの道を通りますから、大変だろーと思いましたが。ここに並木道を作りたいと思いました。

写真は村々をつなぐ道です。

バブグ村を拠点にダウンバ コミュンで支援活動を始めて、1997年頃からクーラ コミュ

ンへも活動は広がっていきました。

すべては、人々の日々の状況と事情(村の伝統的習慣)に直面しながら継続してきた支援事業です。事業の対象となるのはほとんどの村がバンバラ族でバンバラ人です。

マラリア罹患率を減少して、簡単に命を落とす子供を救いたくて、1994 年雨季からマラリアの予防事業を実施しました。これには専門家の許可が必要と思い、雨季のある日にクーラとダウンバコミュン合わせて 57 ケ村にある唯一のクーラ村診療所のドクターに面会することになり、私と当時のスタッフのドラマンは、バブグ村から村人の操るロバの牽く荷車に乗って 13km のドロドロ道をクーラ村行きました。時々降る雨にカッパを着ていましたが、のんびりした小旅行気分でした。下の写真のように雨季には道が沼のようになります。



やっと到着したらドクターは約束を忘れたのか違う村へ行って不在でした。約束しても何の意味もないことも知りました。そしてまたドクターを追いかけて他の村まで行き許可を貰いました。ちょうど 12 時間ドクターを追いかけていました。こうして始めたマラリア予防活動です。投与日には、抗マラリア薬を持って隣村まで徒歩で行き、村長の家の軒下を借りて村人へ薬を投与しました。同じ村に住んでいても部族が違っていると「バンバラ人と同じ水は飲めない、彼らは不潔だから」と言うプル族の男性もいました。「ジャ、自分の水を持ってきなさいヨ」と私は言いましたが、彼の家族はかなり不潔なのを知っていましたから、彼らが特に清潔だとは思いませんでした。ただ家畜を生業としているので現金収入が多く、優越感がそう言わせるのでしょう。投薬の時に、どうしてもカプセル状の薬を飲み込めない女性には、サタが頭をつかんで豪快にブルブルと振るのです。慣れないので上手く飲み込むことが出来ないのでしょう。今では笑い話です。笑い話と云えば、隣村へ歩く途中、粘土質の所では履いていたゴムぞうりが地面にピタっとくっついて脱げてしまい足だけが先に進んだことも大笑いでした。

雨靴なんて履いてくれませんが、足が蒸し暑くてたまらないのです。足が暑くてたまらないのは、1989年に参加したサハラ砂漠での植林の時もそうでした。それは、親切な日本の友人が「怖い虫や蛇もいるからこれを履いて仕事をしなさい」と、5ハゼの地下足袋をくれました。親切を無駄にしないよう、それを履いていたら暑くて熱くてヤケドをしそうでした。



ニナ村の青年リーダー（両端は向って左マドゥと 右アマドゥ、助産師のマイムナ）と
運転手のセイドゥ（向って左から2人目、この頃太って貫禄がつかました。）

カラの支援事業がスタートして20年以上が経過しました。昨年の地球未来賞(毎日新聞社主催)に続いて本年6月に国際居住年記念賞(日本住宅協会主催)を受賞しました。今ヤット社会的に評価されてきたように思います。スタート時から、あっという間のようでもあり長い期間だったようにも思っています。しかし、支援事業は人の命を支える事業と想いますし、建設も植林も人間が存在してこそ生きることと想います。そして、支援は受ける側の問題だけでなく、支援する側にも大きな問題があると思います。

以前活動していたバブグ村に、ある時、フランスの団体から薬の支援がありました。しかしそれは、あちらの人たちに不必要になった薬が開封されたまま、瓶ごと送られて来たのです。村人は「口の開いたのを送ってくるなんて・・・」と言っていました。これは、時々私たちが中古衣類を支援することにも通じているかもしれませんが、口に入れるものは考え

ものです。また支援物資と表記されていても市場で売られているのが現状です。

支援に重要なことは、互いに人権を認め合い、現地の人たちとどのようにかかわって信頼関係を生み出すかがポイントと思います。

今、現地は村の人々が活動に積極的になり、彼らのものとなりつつあります。そして新しいアイデアを生み出して更に進むようになるでしょう。これが、本物となって将来へ繋がることを希望している今日この頃です。

平成25年度事業の報告

野菜栽培事業も、女性適正技術指導も運営管理が各委員会の手に移り、植栽事業も希望する村の人たちが主体になって行なわれています。新しく開設されたソニブレ村の識字教室は人口100人前後の村ですが、その半数が識字学習の生徒として登録しました。そして、村から4人の識字教師が誕生しました。

モバ村のタマネギ保存庫の有効なことが知れ渡り、この保存庫を手本に、コニナ村でも同様な保存庫の建設を望んでいます。野菜の栽培されない季節の自家消費や、収入を得るのにとても役立っています。何よりもタマネギの腐敗を防げるので合理的です。



モバ村タマネギ庫のタマネギ。各自のタマネギは1本の棒で仕切られる。

■ 教育の普及

JICA資金による識字教師育成研修会はソロソロ終わりに近づいてきました。バンバラ語の教師の育成は2014年3月で終了しました。この教師育成研修会は毎年継続していますが、文字を知った人から順に外国へ出稼ぎに行かされるので、村の識字教師が不足します。これはそれなりに役立っているのですが否定はしませんが、このままですと識字教室と生徒だけ残って指導者が村に不在で、いつもクローズ状態です。この状態は支援する側は満足できませんから、解決策として村から出ない教師を育成する研修会です。

研修会最終月の3月には終了試験をして成果を確認しました。試験問題と点数はバマコ市の識字学習振興省(ディナフィラ)からの規定問題です。点数が10点満点の5点以上を過去の試験時も含めて3回取らないと村の教師となることは出来ません。しかしこれは村レベルでの話で、国で決めた識字指導教師は、5点以上を3回クリアして更にバマコ市での研修を受け、その後改めて試験を受けて合格すれば、正式な指導員として認定を貰うのです。この資格を得れば国中どこに行っても専門家として村の識字教師にも一般人にも指導できます。この資格を得るために必要な全ての費用は、自己負担ですからとても村の人には難しいです。



カチョラ村会場バンバラ語教師育成研修会光景、女性も息子と同年代の青年と一緒に研修を受けています。

この3年間のバンバラ語識字教師育成研修会の総合結果は、次の表のようでした。そして、この研修会で我々が一番悩まされたことは、遅刻と欠席者が多かったことです。最初に研修生たちと合意の上で開始時間を決めましたが、開始時間を決めても全く守ら

研修会場	研修者数 (登録数)	合格者数 (合格率)
バブグ 村	20 人	17 人 (85%)
シラブレ 村	19 人	12 人 (63%)
ジャラコロ村	23 人	20 人 (85%)
コニナ 村	12 人	10 人 (83%)
モバ 村	8 人	5 人 (63%)
ヌムブグー村	11 人	7 人 (60%)
カチョラ 村	11 人	8 人 (73%)
計	104 人	79 人 (82.2%)

ない人が3割いました。監督のスマイラは毎回注意しますが効き目がありませんでした。それから遠い村から来るから昼食を出して欲しいという声もありましたが、拒否しました。交通の便のない地域ですから会場までは、夫々の苦勞があります。自転車が途中でパンクしたとか、村人の葬式があると村の全家族が喪に服し、結婚式や市場の開

かれる日にも村の機能が停止します。慣習として村人はそれに逆らうことは出来ません。逆らうと村八分にされます。しかし、どこの開場でも研修生は努力しました。会場となった村では、村長が親切で協力的で村のお客様として扱い昼食を時々ご馳走してくれました。上の表のように、104人の研修生の内79人が正規の専門家となるチャンスを得た事になります。フランス語による識字教師育成研修会は、2014年10月19日終了です。雨季には農作業が優先ですから休暇になり、10月に再開しますのでその時に総合的な評価が明らかになります。

■新規の産院開設と助産師育成、女性保健普及員の活動

現在トゥグニコミュンに、コニナ村、カチョラ村、ヌムブグー村、コニナブグー村、モバ村、ママブグー村、キバン村と7ヶ村に産院が開設しています。

今回は2014年3月の各村の診療所の運営状況をお知らせします

診療所名(産院も含む)	新患数	新生児誕生数	P F	収入	支出
コニナ村診療所	12 人	2 人	8 人	84,500cfa	80,000cfa
モバ村 診療所	29 人	13 人	2 人	140,015cfa	137,015cfa
カチョラ村診療所	18 人	1 人	8 人	58,200cfa	50,000cfa
ヌムブグー村診療所	4 人	0 人	0 人	40,250cfa	25,000cfa
コニナブグ村診療所	14 人	0 人	2 人	66,450cfa	76,750cfa
キバ村 診療所	10 人	0 人	0 人	96,350cfa	79,000cfa
ママブグー村診療所	14 人	4 人	5 人	108,140cfa	34,000cfa

※ PFは家族計画の意味です、数字はPFに訪れた人の数で、投薬と注射があります。
出産費用は1人500円です。新患数は一般診療に訪れた人の数です。

診療所の運営状況は、赤字の月も黒字の月もありますが、これは過去の蓄えから継続しています。赤字の時にカラが支援することは全くありません。村の女性委員会や青年グループが資金を捻出しています。表のように、新患数は一般診療の部門です。これは助産師でも看護師の研修も受けていますので一般診療も可能です。

カラは看護師は育成していません。看護師を望む村では彼らの希望によって雇用の手伝いをしてはいますが、給料等の経費は全て村負担です。

現在クーラCommunからティネンジェ クリバリー村出身の女性のニャラ ジャラ（33歳、下の写真は指導医師と）が助産師育成の研修中です。彼女はとても優秀で、カテゴリーが更に上の看護師としての勉強も指導している旨の連絡を指導医師から受けました。とても嬉しいことです。

ティネンジェ クリバリー村ではすでに産院が完成し、2014年12月には新助産師として彼女が帰郷するのを待っています。この産院は周辺の村5ヶ村の合同管理の産院です。事業は3年前に5ヶ村の代表がカラに、出産時のトラブルや子供の疾患が多く近くに通える産院も診療所も無く、病人は死を待つばかりである、赤ん坊の死亡や出産後の死亡も時々ある等と、多くの事情を説明して産院と診療所の開設の要請がありました。雨季になるとこの地域には水が入り込んで川の様になり孤立してしまいます。現在は雨で道が決壊して通行が不可能で写真を撮りに行くことが出来ません。



2013年12月から、スタッフのアワが毎月モバ村診療所へカラが育成した助産師7人と村で雇った看護師3人の、計10人を集めて学習会を始めました。彼女の自主的な発案で、保健事業に対する積極的な姿勢が伺われます。この学習会では、技術的に不安なことや難しいこと、会計の記入の仕方等、報告書の書き方も合わせて指導しています。

■ 平成25年度収支計算書、平成26年度事業予算書 (円)

収入の部	前年(24)年度決算	平成25年度決算	平成26年度予算
会費 収入	850,000	890,000	900,000
寄付金 収入	5,182,529	4,644,676	5,000,000
事業助成金収入	15,979,664	19,228,445	37,160,433
補助金・その他の収入	2,076,800	1,056,446	6,825,000
武蔵野市 NPO 支援事業費			50,000
雑収入(その他の収入)			
基本財産運用益	800		
受け取り利息	553	1,283	1,283
定期預金取崩し収入		4,000,000	
短期借入金収入	1,689,988	2,638,331	
固定資産売却収入		196,365	
前期繰越収支差額	3,443,182	4,035,082	4,079,343
収入の部合計	29,223,516	36,690,628	54,016,059
支出の部			
海外事業費			
1) 水資源確保事業費	1,780,560	0	300,000
2) 保健衛生病気予防	484,800	1,885,220	100,000
3) 女性自立支援事業	27,000	0	0
4) 教育の普及/学校建設	0	1,292,646	37,160,928
5) 野菜園	0	0	0
6) 環境保全事業費	32,600	70,000	1,360,000
7) 監査法人監査費	300,000	0	4)に含む
8) プロジェクト雇用費	2,605,639	4,008,675	4)に含む
9) プロジェクト運営管理費	5,357,179	6,521,705	1,000,000
10) マリ事務所経費	1,960,323	2,765,646	4)に含む
11) 固定資産購入支出	0	4,580,492	
12) 短期借入金返済支出	0	0	160,000
13) 為替差損	102,881	176,111	0
マリ側合計支出 ①	13,617,502	21,300,495	40,080,928
国内事業費			
1) 広報啓発費(事業費)	751,673	921,731	1,000,000
2) 管理費	9,730,671	10,334,554	8,000,000
3) 短期借入金返済支出	1,035,588		320,000
4) 法人税及び住民税	0	0	
5) 諸会費	53,000	55,000	55,000
日本側合計支出 ②	11,570,932	11,311,285	9,375,000
支出の部合計①+②	25,188,434	32,611,780	49,455,928
次期繰越収支差額	4,035,082	4,079,343	4,560,131
支出の部合計	29,223,516	36,690,628	54,016,059

■ 平成26年度事業計画

A 海外事業	マリ共和国
1：保健衛生啓蒙・病気予防事業	
①助産師(1人)の研修	バブグ村1人助産師育成
②1産院建設	バブグ村に産院。
③トイレ建設	ソモノダガ ブグー村に2ヶ所建設予定。
④ケネヤムソーの会(KMT)活動	トゥグニコミュン内での村に於ける啓発活動の継続。
2：女性の自立支援	貸付事業の管理指導適正技術の監督と指導の継続。
3：野菜園管理指導 コニナ村穀物庫管理指導 シラマンガー浅井戸修理	野菜園での栽培指導監督を継続。 コニナ村へタマネギ保存庫1棟の建設。
4：教育の普及	
識字教室建設と学習指導 学校建設(2校)	3コミュン(クーラ、ドゥンバ、トゥグニ コミュン)で 識字教室(5教室)建設と識字学習の継続。 コニナ小学校、ニヤマコロブグ小学校建設
5：環境保全事業	
モバ小学校林の造成(1ha) カチョラ小学校林造成(1ha)	学童へ育苗・植栽・植栽後の指導。 改良カマド製造と普及。 森林パトロール隊の活動
6：その他の継続事業	産院・診療所の運営指導、コニナ市場の観察、その他。
B 国内事業	
広報啓発	<ul style="list-style-type: none"> ・会員の勧誘。 ・講演会(宮城学院、あま市、岡谷市 その他) ・チャリティーコンサート12月14日宮城学院講堂 ・カラ定例コンサート12月18日 「かけはし2014スペシャル」。 ・機関紙「からばす発行」2回・年次報告書発行。 ・イベントへの参加。 ・その他。

平成26年度の事業についても現地から多くの要請があります。絶対的に人々の生活に必要なことですが、資金的に追いつけない状況で事務局は頭を抱えています。

・ ・ 文末ですが、皆さまの変わらぬご理解と、ご支援に感謝いたします
今後とも宜しくお願いいたします。・ ・

特定非営利活動法人

カラ=西アフリカ農村自立協力会 2014年7月20日 作成